後撰味謌集

上

村上天皇御宇 天暦五年 天徳六年 於昭陽舎[illegible]

お 口 仁[illegible] 一条祖 謙徳公
義人尼 近将 菅原

口 望城 坂上田村丸 利成五世 是則男 出去不記

口 時文 孝元天皇 廿五世 貫之男 貫之ハ一説 欠[illegible]男

口 能[illegible] 天児屋根 廿二 意美丸ヨリ八世 讃岐大掾 大中臣

口 元輔 時平ノ二男 顕忠ノ男 河内掾 清原

お 口 学生 ニシノワラハ 源順 奉行し

後撰和詩集巻第一

春哥上

元日より二条のきさいの文よりしろくよれ
かりちきをたまわりあ

藤原敏行朝臣

ふる雪乃ゆきの衣打きつゝ去きにけるとおとゝ知れ
春立日よめる

凡河内躬恒

去立ときつゝかくよみすかゝぎゝあへぬ雪の花と見えん

亀盛王 光孝天皇子是忠親王原

ふるとわかおきれやけ原かさ[illegible]ゆきにかれつゝみと雖をしらそ
いん

あるかのりとよに折すいちの女れ侍りをとる
月日ひさしくしてむ月乃つゝるちこゝろよまし
ゆるされたわ字あるよ毎のふるを見んと

よ見人しらず

しる雪ゆへ[illegible]春毎のふるよかひあるゆとしきわ
朱雀院の子日よおりしまりしきつゝ事
侍りて元はるしまつてもしく延光朝臣
にうしきく

左大臣 忠平ノ子 小野宮實頼

松もひきまゝりなし摘ぬ成ぬをいつしまつてやもさらん
[illegible]

これなきまとゐしてさけたくへくまゝに
梅花をし雪のつゝめかもとる後

貫之

ふる雪にいけるはん梅むちにはと守おゆてさき
逸捕朝臣のねやのまへに梅をうへて
行ふまゝる後こゝとせりかゝ乃後花さきなと
しきるを女とも其のえらをおゆてそのうちにわそにいくといひてしてゆゐを
春とも不咲雨さるへは花なれはとしをまゝあつすとそ
りしめて宰相になりて行ふるとしにかん

後撰和歌集巻第二

春哥中

さしおひて乃らじめれをうへてあらしと
乃まれとふ所あり角

菅原枝輔朝臣（フンタ、スケモト）

天立文元一年死
年十二
宗

うへし時花さんとし思ひぬに咲ちるこれはいかひ花に
ねやのまへに行のあるにやとゝ行て

藤原伊衡朝臣（コレヒラ）

敏行男

行をく夜深ねをし鶯のなくこゑきけは歌いをれ
やまとゝ行ふる乃山越まうるとて

僧正遍昭

いその神ふるの山への桜花うへし時をしる人そなき

花山にて道俗さけたうへけるおりに

素性法師

山守はいはゞいはなん高砂のおのへの桜おりてかざさん

おりしつゝさくらをおりてとてもちりぬる

りしかなわ

よみ人しらず

桜花にほひしきさ枝に風かふみやまれ侍くさ海によ

紀し

つせ

見ぬ人のかたみかてらはおらさりき人をなけきの花のみ

さくら花をよめる　よみ人しらず

山風とさくらの山の桜花のこけくえみ人しら雲

東蔵に行乃中よさくらの咲けるを見て

坂上是則

桜花にほふともなくみえしこれは春のつみれちるかな

たゝしらす

よみ人しられ

さくら花にほふをおしむ人の花あらしの風のまなかの露

貞観御時弓のほをつゝまれたりける

河原左大臣

今さくらさくよ我身つもりぬまつかあはれ風のふく

宴ありけるときおもよりかる時菊紙のさくら
花よゆひつけ侍りける

菅原右大臣

桜花ぬしをわすれぬものならはふきこん風にことつてはせよ
春のこころを　つを

あさやこれいとわかれそらにそらぬ山鶯のさそ
ことのちるをみて　凡河内躬恒

あひ思ひてつらしとみるもおもひられぬなりけれ
桜花をきて　よみ人しらす

かへるかりいかにかすみの春霞たちまきれぬる風

朱雀院のさくらのおもしろき事と延光
朝臣のかたり侍りけれはみてのちもほと
へて昔を思ひ出て

大将御息所　能子 三条 九条ノ定方ノ女子

さきさかす我にはつけそ桜花人つてにやはきかむと思ひし
たいしらす　よみ人しらす

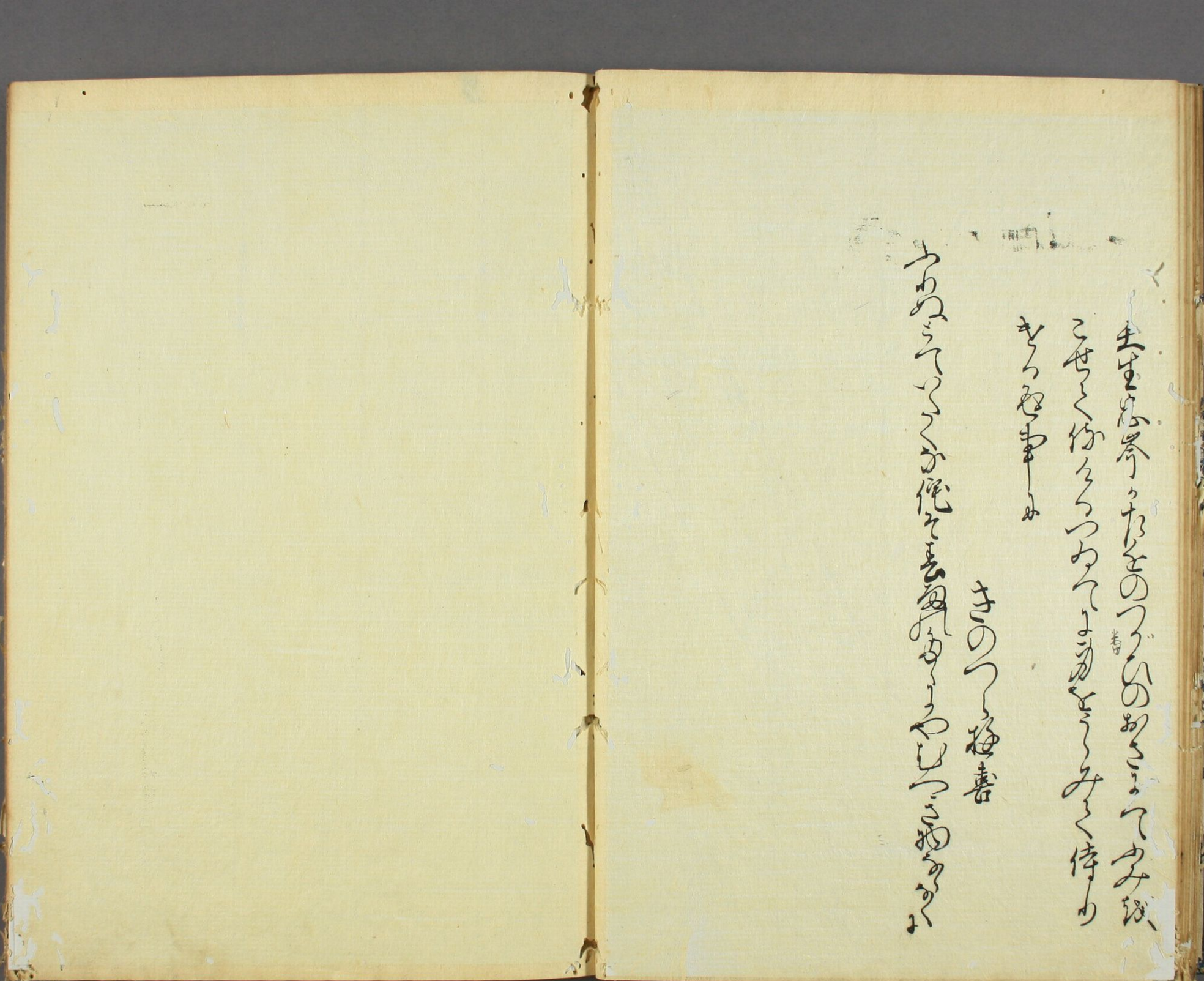
春の花またくれはおかぬよしつゝおかいつかへり花ちりけれ
春霞たつ霞のこの山たのみある桜花うつるをひとつ
大空におほふはかりの袖もかな春さく花を風にまかせし
やよひのつこもりころに女につかはしける

寛平御時花のいろ霞にこめてみゆるさすこふ
ふ銭のみぞくそてまうれとおおかきの稀なれく

藤原興風

山嵐の花のかゞとゝ娘りしらぬ老のおすこれおそろしき
たいしもあ　よみ人しらす
春雨のふるはなみたかさくら花ちるをおしまぬ人しなければ
京桜のこやどるよとわかなく
春霞立て雲井よふりゆく雁乃こゝろなき色
みつし源
ねられぬを忘るく我ゆる老の白風やとこ人にはすゝしきる

めひてわきのおもしろのりしみ春の夜の月
ときゝてさしれくてらてゝこすとて
さくらちる志てゝかきよみそてくなるる
わが宿乃さくら色なかすくさし花乃さかりはさてしおかん
忘れなよくるへ人の家よ花をとゝつとて
亀満人王
ちりまつく花のたちよむとこてつくわくなかる花や立
らふこともわとこさてらむわ乃家よとわ侍
なる
春道列樹
我宿乃花よおくきそらふてもわらふかひあらは宿もかくな



壬生忠岑ゟたをのつゞひのおさまりてゆみ我
こせて作ゝらつゝめてよゐをうしみく侍り
きゝ名事ゝ

きのつら梅喜

ゆめとてはくゝか俺そ長夜ゐるよやしつさゐるかゝ

後撰和歌集巻第三

春歌下

贈太政大臣あひはなれくなりてのちあるかあてその
しるときてつかはしける

敦忠朝臣母

鶯乃なくなる念むしまて我身ひとつのたにあるかな
さくら乃花のあめふさきわきちらちやるを
みく中務につかはしける

貫之

はちかれわるよちるかと桜花あまさせれをうちはらふかな

返し

千代ふとてあはせれど桜もとまむ事常よりもおもはぬ
たゝし我

よみ人しらず

散ぬへき花のかさわいそなくそらにてもあるかなしき
朝光朝臣とまわよ待ちるよさくのいまゝ
ちかられていつらしきる

いせ

随よ散る花をみるとわれねたよ風の吹かぬとぞ思ふらん
女よつかはしける

よみ人しらす

春ゆのあかさ思いは浮れたへの心を秋やまさらん

春のいけれなとりあ勇

よ見人 [illegible]寸

もとの日乃かけそ[illegible]ハ[illegible]鏡に柳乃まゆそまつ[illegible]

[illegible]の[illegible]にかれ[illegible]れ花おし見んかる[illegible]

かなるちてよをやつてぬ[illegible]ことさんもあわとく

延喜御時[illegible]のをれことも乃なりしめ

あらはられくと乃く[illegible]かさしけ[illegible]

凡河内躬恒

かさせとし[illegible]かくれぬこのもとそ花乃おりてハ[illegible]

たいしし[illegible]

よ見人 [illegible]寸

てとせにかさなる[illegible]のあらはそふくるひ花をこんとなのまめ

花乃りとあてかれこれりとしもなくちること

[illegible]

貫之

春くれは[illegible]ことをぬれさぬよきあるけれ花[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

よ見人 [illegible]

曲侍ちらかの朝臣

春くれば花みんと思ふにはそ野への加ちみとは見えたれ
あひしまてわきろ人のかしらとはさわ宗れは
花盛に法ありし計歟

よみ人しらず

秋とうらふまうめ春霞花につ宗てしまうぬる
ぬし

源清蔭朝臣

立ちぬ春の霞をたのすれば花のあたわとこれは宗ん
山櫻をおくて送わ侍とて

いせ

春みちとうてあれる山櫻（さくら花ちイ）ふわけ色と思はさうる舞
こやけくしきろ女のいそれかみとりふこゝ宗
すこて京乃とりたちのりとしつりしきろ

よみ人しらず

神さいくふわけし里に舞人は都に宗霞をたにこれ
法師になりんのふあわきろ人やまとにすかわ
てけとへしく侍くのちあひしまて侍ろ
人のりとしわ月ころもいかにそ花はさきたわ
やとりいく侍られも

みちしの吉野の山のさくむしつ雪とのこみ此りかひて

亭子院奇合のうた

山さくら咲ぬる時はつゝしまれも罪乃志しるべき立海さわ

山櫻をみて　貫之

白雲とみえつる花をさくら花ぞふちらとやうぐとにはなり

たいしら寸　よみ人しらず

わかやとのけさ毎の雪花の花立かわてもなみよおなれ

花をかわまくこそ色ぬるよ吉野川けよつろふさしは山吹

人乃こゝろ毎の見えてなわ々れも山ふきの

ちわさしこゝろをこれみてとてはかりしかる

あのひ〇なさて蛙のおし世をもしるはつろふ山吹の花

弥生計れ花のさかわよみちすかわをうよ

僧正遍昭

おわつれたふさまけふたゝ眠みて乃佛に花をうる

貴いしる為　よみ人しらず

水そこの色さへふる花松かえよの年をかゝてさける夜濃

やらひの下の十日もかわよ三條右大臣の色

物朝臣の家にまうわしてわて作々ふ

夜のもなさけるやうの水のうしとわしてかれれ

おかみなたへくうけぬてかし

三條右大臣

源中宣朝臣 天仁言貞恒之 光孝天皇 孫也

散事ゝきも思ひて表てふことを撫のやうに
撫のちるをみて　よ見人しら須
さくらつゝきあるゝ敬のかゝれすゝ月日も[illegible]
孫生まうゝ[illegible]あるさしつゝさめ[illegible]
申ゝみよそへ[illegible]大臣家[illegible]しきる

貫之

あまわさへあわてゆくへきほとふにしまゝ[illegible]
ゑし

大臣

はゝそわものとけるゝきまゝ[illegible]ハ[illegible]

つゝまゝてきかよひいるゝところにさゝる
車行わていさしくまゝてきあるまゝしてもし
うへわゝわあらゝやらひ乃にてもわ
よつらしきる

藤原雅正

君こ守て年ハ當ゝ[illegible]
ともにいそ花をもみのとまゝ[illegible]
ゑし

貫之

君ゝこゝにとかれてゝ[illegible]
ハ[illegible]
たつしら須

よ見人しらす

後撰和歌集巻第四

夏哥

題ふ知

よ見人しらぬ

うゝふとわハ夏乃衣と成ぬれきるゝ人さへハかゝるさわとわ

卯も乃さけ分頃〇の月きよ見ハ〇あさけ乃なし

卯月とかわ友よちのすゝ侍ハるすをく侍く

かなゝ次をしそこつらしてんと侍りハるゝ

をとるくなわ侍わハれも

郭公きゝわかさ〇ちなかまち堂よのゝ赤のきこゝぬ

をし

菊原乃かほこの布奴まつすゝ侍ゝこおしとゝ
人のてまつつゝ侍ゝ又のさしかさつゝ
毎りつゝ来くかりこまつゝしまる

良峯義方朝臣

いひそめし昔の宿れかさつゝとゝ乃ゝわそかゝみなれ
賀茂乃下つわれ物見侍ゝ女乃くるまふ
いひつゝ侍ゝ来る

よみ人しらす

りつゝやそうちの御玉つゝけてそたの母あひてゝ
也し

捨ふ所ゝ見けてもいふなあるゝ御わひてゝ君ハみそさ
ませいしらす

こ乃ゝわさみ人れ花ゝ松鶴思ひ入れるゝ日そ花
待人雑なくなくよれとゝ思ひの外よりはかゝむ
白ひつゝちゝ花そおりゝゆゝ夏ハ緑のそのゝ志々れも

朱雀院の春ゝ又よおりしましきゝ時ゝ
もゝ又月もかわれ書ゝよりかわてさけ
ゝ人ゝ角これゝ人ゝ見ゝ来るゝ

大春日師範

五月毎ゝ女の家人ゝ時ゝ御ゝきゝ寸ゝ常ゝ也

暑長ゆうや春さとひくをまさて

藤原意浦朝臣

君しゆ夜の少年ゆくまゝに高砂の峯の松風つかしとそ
おもしろうを

貫之

足曳の山下水はりかりひきとのねまさへかぐつるなり

題しらず

菅原高緯朝臣

夏の夜はあふ子のうしてあ数のちかけ海に沈れそ志ふ
みふのごとうの

ゆめとわもしらぬさ夜は夏のうれ暁くこの別なりとも
あひ志れて仮ふ中のれもこれ心さしは

あわなかしらぬしことおわてえおもさわ
くれも

よ見人志ら寸

我なから思いしとわも夜の夜のみもてめ夢をしらぬ
夏乃夜志しぬるこわしてかへりよろ命
りとよ又のあしこはかりし計る

伊勢

ぬる者こさくとは遠に郭公夜ふくめをしらましの
人乃許よつらしきる

菅原安國

何をかしし夢よなるいはる夜風の上ゆくさ上も歌ふ

此くひ事あるしいと世にしたらしたれ何れ事
まつん　　なるしの女
五月雨よなう絶くせ月なれさやかよみ出雲これ
女こりて仰ろ人よりふ仰くつらしきろ
よりん人志す
さてもよわ我志あゆひ桜子乃花ぬかわと人よおもふ
たいしらす
足引の山鶴打たへく雉る海さらと音とのこそなく
五月雨の雨乃こ絶ひさしく雨く仰よせる女
忙りとよすかわこわられも

女
つれくとなかむ事なの郭ひとつまつけてそ孫なのれ
せいしらす
色よへぬ花なちもなよ杜鵑子世とあらせるしきこ酒
猿ひして雲こひしし時馬神なひ山よさとあてなく
夏乃夜よ無しきんのよとめいもな梅そしるへなわきろ
女れ泗見よすかわこわきろよこと車かたてに
きこわくるよもれすといひらしてのちよ
何かしきろ　　伴勢
郭公ちなかる音をきこそしてあらぬもそれ

後撰和歌集巻第五

秋哥上

雎貞乃四子の家の哥合に

よみ人しらず

俄にも風のすゝしく成ぬるか嫁ぬ日とも見へ[illegible]

さいしゝ寸

打つ衣に[illegible]きまぢる秋風[illegible]

も乃思ひ[illegible]秋立日人[illegible]

さ乃めくし君ハつれ[illegible]秋風[illegible]

おりふ事[illegible]

いそのかみ古き都の荻原に秋ふけ行風のさびしさ

題しらず

秋風の打吹そむる夕暮ハそゞろに人ぞ恋しかりける

大江千里

露けしと萩が花ずりしつゝも秋風にちる萩の花かな

荒れたる宿の月をかはして便いとゞ

ねざめする　よみ人しらず

秋萩をちらせる風の吹ぬれば人の心もうつろひにけり

題しらず

在原業平朝臣

あき萩をちらせる風の吹ぬれば心ならずも草のはかなさ

源昇朝臣

時々月かなしかるへき時ハ月の日かけぬるまの月の出るかなしかれく

まして世をいとふ人はなれて

亭子院

あまの川ちかひしよりくたちぬ今宵さへあまの

題しらず　よみ人しらす

天の川あふせはおりしおりおりにあふ

七月七日よみてまゐらせたまひける

毎年わかれくまてこく

源中正

芳恵敷忠朝臣

あふことのと夜をまつ七夕よおとりやしまんこひ渡ひて

七日の日

よみ人しらず

七夕の天の戸渡る今夜さへとちかく人のやすらむ

七夕をよめる

天川をきまてわかれて君にふまてハ後にまて

銀河岩こひなこの立ぬつ秋の七日のくふをそまつ

きのとしのわ

宗ふりや天のいはあせなんそこ升ことなくたまつ

よみ人しらず

天河なれくらふる七夕無ん渡なほ秋のしら露

天河をこの白浪ゆるれとたくまてわさぬまつよ

放れも川さわまてる天河かにこ見えてくらふる且ぬ

天河こひしきをふそまてわぬる瀧津なみこ袖ぬれ

七夕の年（疾ノ年）とふりし天乃川雲立まてわいさこそ

元河内ニ

秋の夜のかりき別を七夕ぬてぬまにはうかりふるれ

七月（ヤウヤ）八日のあしたり

道物朝臣

七夕のこゝろあしたれ天ヲー　いまかなかなみとこ

おなし山越　貫之

あさ戸明くなるめやあらん長人おもかぬ別の空とこひて

おなし事侍く　よみ人しらず

秋風のふ草にさあらに俺しきなれことなれと思ふ袖かな

たいしらす

まつむし此初しきさそふ秋風は草羽ゆゑ吹そめにけり

葉平朝臣

ゆくかたる雲乃へまてあてハ雁風吹とかはしつ深せ

よみ人しらず

秋風の草紙そよさて吹なへよかゆふしつゆひそ此

ひとし此春さく此をくれやあさつゆ今日さすむ

よみ人しらず

日晩乃春さくかなる松虫のなのこ人をおりしつゆ

いおわて鳴もしつゆひとし乃これも此おさへ

秋風の吹くるとひにさわくれ草の根とよこしこれ

我おとくもれやかなし此さわく吹草のやまわに春さくなく

あ毎こいひしやもあらん秋にし雁松虫の春のかなき

雁乃野よさやもなく人をおりけれ去しこそら鳴ん

秋風のやく吹し其ハ鳴しき春さく松虫ハ

藤原元若朝臣

秋くれは野とせに生れとわみさる都のあやをは雖ゆきに

よりん人志しす

風ふきなく松虫の涙とう草も色とる露をうて決

秋風の吹しく雲は山なかしなみ立へるをとそ

是貞のみこの家奇合りし

壬生忠岑

松のひゝ風の志しくをまつ世て宮田姫とそ秋ひ匂

秋大浦こうつまきのかたいしなる家に行わ

きりにおとさのしんにふ見をきしてつらしきる

たゝ大臣 小野宮

山さとのねさしいしは萩のもれなひくごとにそ思ひや歌

堂い志しす

小野道風朝臣

頃にはいぬいかにせほ花鶴力を秋風に拾やいそらん

ふてわのおとこにふものいひそう其ひとわに

つさにそれはいつ月ひとわにいひつらしきる

よりん人しす

わ宋とは海とうのことをかせつなりとそうの男とそ織

ゆし

ひとてあつる山田にひつらしきみまとに稼とかしへ生る

後撰和謌集巻第六

秋哥中

延喜御時に秋哥めしあわせられて[illegible]

[illegible]

きゝつゝ[illegible]

秋さわれ立ぬる時にいつゝ[illegible]

花見[illegible]出[illegible]地を[illegible]

寛平御時[illegible]

よみ人[illegible]

浦[illegible]秋さわれ[illegible]

[illegible]御時の女郎[illegible]合[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

秋の野[illegible]

女郎花[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

延喜御[illegible]

おもし方も秋ハ俳しき村なれど露宗かるもん袖をしき思
亭子院の御おの花のいとおりしろくおき露
れをけ爲をめしくみをさせ給ふ
法皇御製
白露のこゝろもなかおりもんおりての後もやうさ袖を
御也し
いせ
うへさて君ゆ志めゆふ花なれハ玉とみえてや家をとらん
大輔(オホヒスケ)の後(コウ)涼(リヤウ)殿よ仰ゝらよ前つかりの女郎
花をおりて御かりしをう
右大臣

おりてみる袖さへぬるゝ女郎も露けさ袖ととやさしもん
也し
大輔
前ふかくらん露を女郎もなかふおとしふとまゝ花ぬ也
又
右大臣
ときあれ露れかゝるゝつまれまゝきぬるとも思ひ給ふ
也し
大輔
今ゝや打とけぬつさ白露れいとくまてきをやへゆゝら
あひしるまく仰ゝら女れおとなたらて仰家
出ゝ心くそつゝハさわゝわ八月ゝかわよ女の
りしとわかりとゝつれなさとゝひをこ世ゝ

[illegible]

貫之

秋萩の[illegible]秋をいろいろにおもしろかるべく光をさしに[illegible]

[illegible]

天智天皇御製

秋の田のかりほの[illegible]をあらみ[illegible]ては露にぬれて

よりん[illegible]

秋神に露をとくなるて何雲[illegible]

秋萩の枝もさをにしなりけり[illegible]露をとりくとけば[illegible]

[illegible]

延喜[illegible]

貫之

さを鹿の立なく寺との秋萩にをいろ白露秋もけぬ

[illegible]の[illegible]乃草[illegible]

文屋朝康

白露に風の吹しく秋乃野はつらぬきとめぬ玉そちりける

[illegible]

秋のうちをく白露を[illegible]

[illegible]

よみ[illegible]

[illegible]平草の[illegible]

白玉の秋乃[illegible]

秋乃野にをく白露のさえ[illegible]

かゝる衣袖くつるまでとく露はわが身と秋の雨とも見ゆる
大宮よりの袖ひとつあるなくに露やまきてとゝ見
鈴とふとく露袖にけるあきのうき時は波にぬれかゝる
あさはれ寄とてよめる

貫之

海の野は草もわ家ぬとも袖の地思ふまでに露けり見ん
ふるや姫

いくとへく渡り思ひしらぬべき野島は秋を見みく月をも
よみ出しら守

秋は夏の月乃新れこのまゝに落てこゝろと見ゆるに
袖まつる月は光は秋ことにこゝろぬけとみえ一く
秋の夏は月にかきなる雲晴て光さやかにみるもしもる
小野美村

秋乃は草の月はいくこゝ無なれはこゝろの枝にさやさやさ見ん
あるや姉

煤乃はゆんにつれる月を立てゝあるみあるべと急にも
惟貞は御子の家は奇合に
よみ人志しら守

あさは夏の月乃光は清々れと人の光く海にてしき深
秋の月つゝまゝてゝ物なるはやこにかゝる為なりしらさ遠

八月十五夜

荻原雅正

いにしへも月をぬ秋ハなきを抱をわさてしき夜のめつらしきに

よみ人しらす

月新ハ雨なりし夫れ秋乃夜をしてさて雨ならんなりけり

月をみて

紀淵望朝臣（光イ ヨシモチ）

そとをとこ秋やとくらん今ハ月乃つれ色とかつらぬ

貫之

夜て見さしてもあら孫と月新をたまらぬ秋の雨とこそ

よみ人しらす

天河ハしらみけてとらめ雨あらしなりて月やよしむと

秋風なるとや立ちん天河にてらをも明く月乃なりて

雨くれもおりふりそこそれつまりけりみちもとちの夜さわ

ふかや坤

ほくわ抱思ひ秋の夜にそ濃の川乃とみちなりけれ

よみ人しらす

吹風よふりさたのこ乃むかしハ秋のしをおさしとおもひ

これさこのみこ乃家れ前合のこと

秋の夜ハ人をしづめてつまくとかさなすことの意にそなりよ

ぬ

霧をよめる

荻原清正

ぬさと無く秋しなれは白霧ハ千種にをくらむとかひ

[illegible]

八月十五夜

秋風にいとゝ更ゆく月影を立なかくしそ天の川霧

延喜御時秋歌めしけれはたてまつる

貫之

女郎花にほへる秋のむさし野ハつねよりも猶むつましきかな

兼覧王

秋霧のたちかくせれは女郎花も立よるかとおもひけるかな

たゝしゐて人しらす

そこらしも草むらことにまつ虫のなく声たかく遠さかりけり

女郎花おひたるまゝに秋風の月の光にさそはれて

をくらやまなにゝ花の色々に錦の衣をおりかけてなん

貫之

白露の夜ことにおきて女郎花さけるの野へにおとすなみた哉

なみたおちハ玉みえくる風ふかは露となりてや花のうへにおく

みつね

たちかへりなに女郎花おりけれは我身にたとる心地こそすれ

よみ人しらす

秋風にあへすちるとやねえんとみるに色そ花のまにまに思ひける

とみるへにしかもわかき松虫をとりかやとて遠さかるらん

前栽にすゝむしを入てはへりて

後撰和謌集巻第七

秋哥下

[illegible]

[illegible]

[illegible]

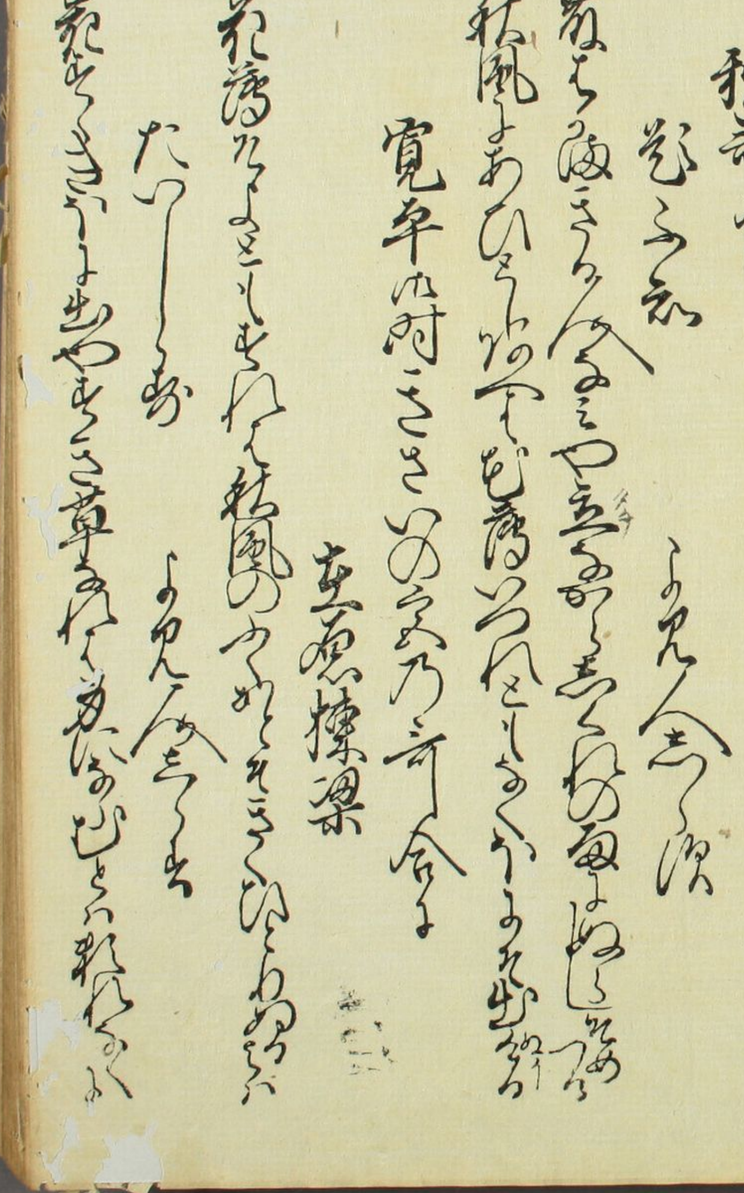
寛平の時ことさいの宮乃哥合に

在原棟梁

[illegible]

[illegible]

[illegible]



よみ人しらず

天河うわそとまで浮さゝ山にて思ひもしつさ浮ら
遠浦の鈴ほたをかねよ侍ふる時むさし船る
むさしよまかわ立目にてうよ浮ふる事あれて
かいりしおりしはうさのかねめくむさしよまかわ
ああ浮ふとわ後方鉄をし あつひ送侍ふ

藤原忠房朝臣

秋霧れ立船てこ海を引時ハ浮よのわく君をこひなし
さしいしらず

左恵之方

いその神ふるの草に秋ハ今鉄ふことにてあらなまわふ

よみ人しらず

秋の野乃みしきれこゝし あるハ今ふ鉄ハそめ通ふ
あきれ来いかゝる霧れをさつめハちゝ乃草に鉄ふ
いれをとるまさて志れ人秋の野よろゝんとふ草

きのとしらり

こゝ思ひてなさそしぬつき秋さわに友まと世る麻よ
秋と

よみ人しらず

あれさけこ都ふる砂まさをれなかしよを独なるん
おもへてくけとそあれ無花乃雲ふとる秋の風よろゝ
神とれ山へそおりかゆらいつれのかさまにしとみ明ん

これかれよりのちかたらひ

忠岑

いまはとてえこそみしかの秋のもとゝの露のなごりに

あはれしら波　よりしら波

秋風に打靡くを山の野邊なるてはしきしのゝ

かとさそふ秋かとこそ[illegible]

あるかなきかと我ぞ思ふ

貫之

むすびてかつこそ見しかたらけのこゝろ

秋されば[illegible]

かくれ山をこゝろにうせ法し

[illegible]

こなりしすゝ[illegible]

菊にはとてさせしよりつらしとあれば

おもひてのこゝろ

いせ

かしらは岩のいはをのうへなるやとは[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

立田ひめたむくる神のあればこそ秋の木の葉のぬさとちるらめ

木の葉よりくれなゐ錦みつとれば雲林のかへちるかな

秋風によりちるもみぢ葉の錦織る

若菜の山かりみ花とちるかな風にちりみくもし

もみぢ葉はわがみもしく秋の山へてこそみゆれ錦なりけれ

立田川色くれなゐになりにけり山のもみぢぞ今はちるらし

貫之

龍田川秋にはあれど山ちかみ水もみぢはね

よみ人しらず

もみぢばのながるる秋は河ごとに錦あらふと人や見るらん

立田川秋は水なくあせなゝんあかぬもみぢのながるればをし

文[redacted]朝康

なごりなくちるぞまさりて立田山風にみだるるもみぢ葉を

藤原忠行

木からしの風にまかせて川秋のもみぢ葉ちらば錦なるらむ

よみ人しらず

まつる神なくて山姫のぬさとぞ今はもみぢちりける

貫之

目にみえて風にもまかせぬもみぢ葉は錦なりけれ

よみ人しらず

貫之

秋の月光さやかみとみちのおつるひさみえとうかる
世いしらぬ　よゆん人しらす
わき毎（セイ）につくをとゝるれぬ木屋ハ春にくらとも[illegible]
おとこの花のつゆんとて菓のわかとさく
可にこひにつかしてわかれ花にくらつく
ほうしかく
みな人におもしにわと菓花君にあかれ[illegible]
世いしらす
六風にまかせすゝ無や秋の月ハ人にかくらく[illegible]

とみちのちかつとれる木ハりとかく
お葉にハちる木ハりとにとゝ[illegible]秋やうら
[illegible]
くわく[illegible]
思ひ出くとうにハあらし秋つゝ色ハきわをみちらん
なか月のつこともれ日りしちにひおをつ[illegible]
くをこせく[illegible]
ちこのぬかむしめ
宇治山ハとみちをみ[illegible]月の[illegible]日をし[illegible]
此月つこともよ　[illegible]書

後撰和謌集巻第八

冬哥

題ふ知　　よみ人しらず

神なれはかれもしへそおりかゆらいつまれこかまつもとゝ見
とゝまれかりともなくさかしれもしろあまのくらひに
神無月かりこふせみさしめなれ対毎そ冬の初なわけ
冬なれはさかのにせにあらはれ独ねてきき音をそ鏡
ひとりぬるへのさくに神無月にはかにしかる神志くれな
秋なれ対毎ふわぬる秋なれはちることのもとなふ見
ふ風はかはそねとみなれはしとわぬるとの為にそ志みな

秋なれ我身対毎にふわぬれはことのもさへにさへらひなり
神無月対毎とかわはやしきてゆきてよさへかとる成ん
神無月対毎とゝもふ神なひの杜の本のもりふわにれ
ぬしつらしきら
世のむまもなれてぬれは神無月志くれなのもしぬるこゝろ
山へつるとて　　増基法師
神無月対毎ハかわをみよそへてきたる山ちにかをなしき
十月計まに大江千古かりとにあらんとて海りより
なれも侍ぬ程なれは海ゆとまてきてそ川に
てつらしなり　　藤原忠房朝臣

藤原敦忠朝臣

後撰和哥集巻第九

戀哥一

かくしてあひ志わく侍ける人につむこと
あわく又何ひくく侍ければ

源宗于朝臣

東ちはや乃中山なかくまあひ志そのちそ俺わかる
思ひ志わかるる人に知かくわし侍ける人
乃さりしく侍ければ之わさつかはし
ける

貫之

曉となれかひ名しまるれはよひもいてそまひわれ

源おうしきぶかよひ侍わかるを侍くまかれ
なわ侍しなれもさまわれかくのあかかわあ
き我をつふこそつらしけ留

巨城

もとゆ

まとろまぬかへにし人をこつかるまきかなん長恨の愛
あひ志わく侍ける人のりとよ也事こん
そつらしきら

元良のみこ

くやくとまひ名言ともまかしそくるあしてとゆ海
ぬし

菅原かけみ

名言は松にもかくさ蔵れをつるあしやきしいつ

源信明

後撰和謌集巻第十

戀哥二

藤原忠房朝臣

源中将

忠房卿

亀源王

菅原輔文

のち

大輔

又

敏仲

いみよ粉おわくらんなみさ川うれしきをあしなかれ物也
わさとよはあらてとこしくものつひ出れ侍らん
女れいふしあらて人なさそはくすかわよくれは
こ乃井ぬよかきつけくはうしまる

菅原敦忠朝臣

かくわくらん人のいを志ら露のをくらもれしらぬ
あひ志わて侍わくら女我ひさしうとひ侍
くれはいとゝしきなんまひ侍と人乃つ女侍れ

藤原顕忠朝臣

寫乃雲村よまひくなく歌を志れさしとそ我はさしつる
ゆえんかよしくら女れちと人なあひぬとさて
はかりしくら

平対白朝臣

かくはわつ女なれとは知なから人をうらしなあれ
おとこ乃こゝわくれはつらしまる

こまちうあひ

我とれはむし薄かわうらん君なるまれの弱とこ思こうな
女いしまる

枇杷大臣

よ我こそのわりと清ぬる男にあれはうしることそかしなる
かへし

いを

いろなるにつけてもそれぞれ遠おりに心をえやみをなら
袖のこゝろひさらぬ女れりとよ文つくしてわなるに
にちあしとて色事をせさわれは文つくしけ

大江朝綱朝臣

わ[illegible]の[illegible]君[illegible]ともふかゝらおとともふぬ[illegible]袖を
おかつゝ[illegible]に袖のこゝろいつくしなるをさしまさて
いれさわ[illegible]れ[illegible]つくし計ふ

貞元
元[illegible]のみな　清和第三皇子

たゝになるそや我なれ[illegible]しむし乃つまとなかるもん
[illegible]し

おほつゝ[illegible]

人にいさまれなるさなれ[illegible]れは昔も今も志しすをいひ
色事をさわなる女のふみ伝うこしてえて

よみ[illegible]

わとれは[illegible]なくさ[illegible]海千鳥八月は都ゝそきゝ海[illegible]れ
[illegible]とこゝろまてしんなしなるえおはさわなる
[illegible]

河とみくまてゝぬ中よなるゝはいて袖思ふなるなりわ
[illegible]しわわけ海女よつくしまる

梅公頼朝臣

お海雲よなる[illegible]りの[illegible]のこさにさわつお[illegible]

賀之

行くえなみ　よるの波路を　君よりも　先に越すべき　風ぞ吹きける

兵衛督

見わたせば　よもの山べも　霞こめ　うらさへにほふ　春の曙

よみ人しらず

春霞　たなびきにけり　久方の　月の桂も　今や咲くらむ

中将之衣

延喜御制衣

うつせみの　世にもふるやと　思ふまで　なれる袂を　見るぞかなしき

右京大夫

春霞　たなびく山の　さくら花　うつろふ色に　なりにけるかな

賀之

我が宿の　花見がてらに　来る人は　千代の春とぞ　かへるべらなる

おもしろき　花の盛りに　月見れば　千年も一夜の　心地こそすれ

賀之

君が代は　尽きじのみこそ　思ふべし　天の羽衣　まれに撫づとも

よみ人しらず

千とせへん　末の松山　波こえて　あらしも白き　雪の夕暮

賀之

おもふどち　春の山べに　うちむれて　いはばや君が　千代のあきまで

よみ人しらず

君が代は　千代にやちよに　さざれいし　いはほとなりて　苔のむすまで

たいしら寸　平宮女

我乃こゝやりてさまなしとも思ひとなるぬかよ詠

取し　きゝ乃めれと

ぬしの乃のりしとしらしいとせんなりしれ三ゝ様なるぬ

おもひさせる母れ家乃おもひかはりていい

いれ分なる　つらゆさ

俺さる我乃ハ霧をおかしくハ君かさ〇の草まきなん

堂いしら源　左原元方

みかりなるささやいつこあふこなみ立らかことしらぬ我乃ハ

東天なるなるといふとれりとよ如とれいひなる

おやの戸をさしてぬそいわまなれもえれあしさま

川のうしなる　荷原滋轉

なるとりわさしいさまれ家わしまれそよるへもなれ

たいしら源　よみ人しらず

高砂乃ゝ〇れ白雲かゝわなる人乃ゝをとのこゝなるかれ

長明乃みこの母れ宮衣さとよ侍わなるり

洗らしきる　延喜御製

こそまれこまり川ハ先なる紀行の元ゆきてさへしそ年代に

たいしらす　苧鶴活

加宮ゝ乃ふまみしいわまや濱千鳥ゆくかりしらぬ遠まりしん

あるこころは三わかるゝえの　かしかわたる人を
つゝしきる

荻原蓋義(モチ)朝臣

まこはこのそこ所あわかる三わかるゝかづさて(まイ)いかん渡ほかまさ
如何しまつりしかある

梅實利朝臣

はしこも思ひそもそ所渡川なかれて人を如何にも
あへし

よみ人しらす

なかれてこの如何しかん渡川新舊へ是おもひなくに
人をいひまつ　ひ舊つゝしけり

平定文

なに事を今はたのまし毋ち　ゆかの神とさすらぬ我身なわ
ゆし

おなつ

千ゆ舊神みしそなれぬしさ海へ行るとも如何
如何しとまかわかわけをさまてこ　ゆわ
なれをいひ　ゆる

貫之

うみ舊し男よりつゝ　ゆ衣さていつゝ　に　と
あひ志わて　ゆわ　人をひさしうと　
まかわかわ　ゆ　ゆ　つゝしけり

壬生忠岑

すゝこ乃無の松に立ちる白浪のうつにおわりやねなる浪ん
おとこ乃りとよわいまゝ室と人あんなれいしい
つわれ女りしかつわ前

よみ人しらず

思ひんと女ぬし事もある物をなさなとてぐらに思ひ
ぬし

春日野にふりの色わらし物をなさなとなりつゝしれ
見しし寸

[illegible]
人乃ひとわ[illegible]

右近

思ひんと女ぬし人のわわとさくいひしことのんいろちつまなん
さくさくまの釣浪乃ふやまゝさまよりけ乃朝浪
とみちれくまゝある前くをつくしく家まとみうん
して今ハ毎つかゝところかしといひなれま

源清蔭朝臣

さてと松まつさ鴨乃わわれハ立よわぬつくおとかゆるかな
おと女れふみをめ乃ふんといひなるまみをまゝ[illegible]
うみなるまそのふこのうゝ[illegible]さけてつゝ
なる

よゆんへしらん